

インプレッサSTi VSランサー・エボ直対決ともいえる95年の国内ラリーだが、いよいよ本命たちの直接対決の場がやってきた。全日本ラリー選手権シリーズのダートオープンニングイベントである「A.C.Kスプリングラリー」だ。大会前のワワサでは、ランサーユーザーはこぞってエボⅡに乗り換えてきて、インプレッサSTiとの対決が注目されるはずだった。だが、会場に展示されていたものの、主力組で実際にスタートしたのは片岡貞宏、山口博、田中伸幸などで、「まだまだ未完成やから、現状ではエボⅡのほうが速い」

と言う松本誠をはじめ、石田正史、坂田源文雄はエボⅡのまま、実戦診断はおあずけとなつてしまった。

さて、昨年からA.C.Kは主戦場を大分阿蘇レーシングパークを起点とするエリアに移している。今回も同様だが、昨年主催者が約束したように、SSはレーシングパーク内だけ

ではなく林道SSがたっぷり用意され、A.C.Kらしい「悪路を旨いっばい走らせる設定」になつていた。さらにこの週末、九州地方は瞬間最大風速46mという台風並みの悪天候に見舞われ、A.C.Kらしい「アツ」に拍車がかかった。その悪天候を制したのは、昨シーズン後半から調子を上げてきた綾部英雄だ。94最終戦で「る割」がたは上がったインプレッサのノワハワは、STiバージョンにも受け継がれ、さらにポテンシャルを高めてきた。開幕2戦は不運もあり優勝争いには絡めなかったが、今回は事前のサーキットテストでブツちぎりのタイムをマークし優勝候補筆頭だった。

そして、ラリーが始まると親子はど年の違う新井敏弘を過る展開から、新井のマシントラブルに乗じて逆転。2位塚井幸彦に15秒差をつけ今シーズン初勝利を飾った。綾部のシリーズ序盤での復活により、中盤戦以降の戦いがぐっと面白くなつてきた。

(結果と詳細は132ページ)



「ノレていない」を速見しながらC2位入賞するし、たたかき、今季の塚井幸彦は平がつけられない?





エポⅡでの出場となった前年優勝の松本誠。序盤は精彩を欠いたが終盤盛り返してC3位をゲットしたが、松本としては不満足!

'95 ACK SPRING RALLY



エポⅡが全日本ラリーに登場したが……



石田雅之はサーキットでのJSSの運れをハイアベで取り返し久々のC4位に入賞した。



C7位はSS1のトラブルを悔やむ大嶋治夫。



インプレッサに替えた藤田龍彦はC6位入賞。



堅実に走りきった西尾雄次郎がC5位。



↑↑「全日本戦に上がって3年。3年をメドに考えていたんですが、やっとやりました」増村淳にとっては、遠すぎた感があるがやっと日優勝を手にした。



B 2 位には、開幕戦での星野博の活躍に刺激されたか、'94年B・C地区Bクラスチャンピオンの横山武治が入賞した。チャンプ候補田口幸宏はB 4 位。終盤のハイアベで沈没した。田口真は悪天候のなか、堅実な走りを見せたが終盤2SSで遅れB 3 位。





サーキット&悪路で各種タイヤが用意された。



悔しいB 6位は吉武正博。ブツちぎりのリードも、天候が急変しマーチRに不利な悪路で後退。



今回はナビとのコンビネーションが合わず、藤田豊は終わってみればB 5位。



ラリー区間の読み違いで景山陽彦はA 3位。



前嶋光男はSS 7で後退しA 4位に終わる。



平塚忠博は幅田リタイヤ後追軍奮闘、エンジン不調に悩みながらもA 2位。



↑→「TRCAの3位が自信になった」というACKマイスター桐雅広がA転向後初優勝。



'95 ACK SPRING RALLY



Aクラス上位入賞者。左より2位黒田正彦/平塚忠博、優勝桐雅広/秋竹誠之、3位景山陽彦/岡田誠。



Bクラス上位入賞者。左より2位福村幸則/横山武浩、優勝増村淳/吉田和弘、3位原口真/石田勝弥。



Cクラス上位入賞者。左より2位大満敏夫(代理)/桜井幸彦、優勝綾部美津雄/市野路、3位松本誠(次原)/岡本豊。

RALLY 詳報

■ 昨年の公約どおり、悪路をイヤというほど走らせる。ラリーを復活させたA.C.K.。当日は暴風雨が追い打ちをかけ路面はさらに悪化していった。コンディションが悪くなればなるほど強みを発揮するベテラン勢をしり目に、ラリーをリードしたのは片岡と新井だった。

(報告・村井 豊)



競都美津雄/市野郎コンビが復活

熟成したエポⅡをチヨイス

「5年全日本ラリー選手権シリーズは、待望のダートシリーズに突入した。この第3戦「A.C.K.スプリングラリー」は、ランサーがエポⅡを投入してくるといふ事前情報が入り、エポⅡとインプレッサSTI、最強パードン同士の争いが注目された。

しかし、スタート会場の大分阿蘇レーシングパークのパドックには、エポⅡはいたにはいた

が、

「エポⅡは未完成だから、まだ実戦では使えない。いまの状態ならエポⅡのほうが速い」という松本誠をはじめ、石田正史もエポⅡのまま、また、開幕戦で優勝した奴田原文雄もエポⅡ。実は、先に現地入りしてサーキットで練習していた片岡良宏がエポⅡを壊してしまい、チームでは先鋒の片岡が奴田専用のエポⅡで参戦、奴田原はエポⅡでの参戦となったわけ、結局エポⅡでの参加は、レギュレーションでは片岡をはじめ、山口候

田中伸幸の3台だけだった。

この週末の大分地方の天気は朝から激しい雨に見舞われ、ラリーが進むにつれてさらに悪化。阿蘇では瞬間最大風速64kmを記録する白風並みの荒天だった。路面状況は最悪で、両車の対決ムードも水を差されたかっこうだった。

ちなみに、エポⅡドライバーのインプレッサは、「上(高回転域)が長くなくなったせいもあるんだろうけど、中速域の力不足を感じる」(片岡)という。いずれにしろこの話題は次回レポートまでお預けだ。

さて、A.C.K.スプリングラリーもフルグリッドにはならなかった

片岡&新井は豪雨の後退 悪天候を味方につけた 名手「の走り」



ACK SPRING



サーキットステーションではトップだった岡崎憲一だがリタイア

「これは、昨年から「事前試走の横
行で、従来のラリールートが使
えなくなった」ため、舞台を西
に移して、大分県麻生レーシング
パークを起点とするルートに変
更された。昨年、高橋健二（競技
委員長）が

「このエリアでの主催は久しぶ
りなので、SSを決定しなかつ
た。だが、今回はACKらしい
ラリーを開催する」

と話していたとおり、今回は
SS3に加え、ハイアベ区間もふ
んたんに用意された。もちろん
昨年も行われたサーキットラン
も設定されている。

主戦場は、カーブコースでの
ジムカーナと本、メインコース
3本、ダートラリー本の計4区間
10・73km。林道SSは5区間

17・75km。ハイアベ区間はバス
コンハイアベを含め約18km。合
計で実に50km近いドライブパ
ー・セクションが設定されてい
た。

加えて、荒天により路面は荒
れている。まさに「悪路をイヤ
というほど走らせられる」。AC
K本来の姿に戻った、といっ
ていいだろう。出走台数の減少、
ラリー区間事情を考えれば、こ
れだけのラリーを実現した主催
者に敬意を表したい。ちなみに、
今回も出走台数はフルグリッド
にならず、Cクラス21台、Bク
ラス16台、Aクラス10台の47台
と寂しいエントリーリストだ
った。

ラリー区間も荒れに荒れた。
まず最初のジムカーナコースか
らスタートしたが、いきなり坂
田原が激しくコースアウト。
「2速から3速に入れた途端に
コントロールを失った」

路面にたまっていた水でハイ
ドロブレーニング現象を誘発し
てスピン。ちょうどシケインの
手前で、スピンしながらウレタ
ンバリアにクラッシュし、マシ
ン左を大破してしまった。坂田
原/小田切順之にタガはなかつ
たが、早々とリタイア届を提出
せざるを得なくなった。

坂田原だけでなく、リタイア
しないまでも加勢裕二もスピン
や選手にコースを外れタイムロ
ス。優勝候補頭だった山口修
や廣川慎一も、ノーコントロール

ル状態でコースをショートカッ
トし、致命的な15・0秒の計時
を受けた。さらに、今季ツキの
ない大嶋治夫はコース前半でエ
ンジンが水を吸い込み、コース
の大半を回転が上らないまま
の低速走行。後続の坂井にパス
されて最悪タイムに終わってし
まった。

このSSを最速でクリアした
のは、昨年このコースでいきな
りコースオフしてペナルティー
を受け、ラリーを棒に振った西
尾雄次郎だ。悪条件に振るほど
名手のウデがさかえて、1分13秒
をマーク。だが、14秒には片岡
と新井敬弘、そして今季復活宣
言をした岡崎憲一が並んでい
る。

続くSS2は、メインコース
を使用した約4kmのサーキット
ラン。ヘビィウェットでも、ペ

「結局、サーキット内のセクシ
ョンを終了してトップには、な
んと新井が躍り出た。開幕
戦の坂田原の優勝に刺激されて
やっとなつていた競争心に火が
ついた。さらに、岡崎が新井と
同時に並んでいたのだ。チーム
・アヤベ入りし、マシンセッテ
ィングを總部に依頼して精神的
な余裕が生まれたのだろう。今
季の岡崎は、デビュー当時の目
の輝きを取り戻している。彼ら
を追って總部が3秒差。總部に
とっては、SS1最初のコーナ

「どう、どうなることでもなさ
なくて、なすがままにしてたら何
とかサンドトラップで止まって
くれた」

と滑り汗をかきトップと10秒
差の6位に後退。シリーズミ

ストタイムのアベレージは1・0
0km/hを記録している。こ
こでも若い新井が頑張って、2
分25秒のベストをマーク。故に
続いたのが、スタート前の情報
で事前練習ではブッチギリのタ
ィムをマークしていたという競
部美津雄と岡崎のチーム・アヤ
ベコンビだ。それに加勢で25秒を
マークした。ちなみに今回、競
部の横には草加浩平ではなく市
野浩が乗っていた。

スタート目となるSS3のサ
ーキットランでは、總部が下馬
評とおりの快走を見せ、SS1
のうっ憤を晴らすかのように激
走した山口とともに1分28秒の
ベスト。そしてダートラ、とな
る手前だったが、特設会場の路
面が水田のような状態になり、
キャンセルされた。

「飛び出したロスは悔や
まれる。さらに5秒開いて松本
と加勢。加勢はSS1のロスを
取り返して急浮上だ。」

有力どころでは、SS1ベス
トの西尾が、SS3の下りて回
り込んだコーナリーを4速でスピ
ン。

「どう、どうなることでもなさ
なくて、なすがままにしてたら何
とかサンドトラップで止まって
くれた」

と滑り汗をかきトップと10秒
差の6位に後退。シリーズミ

「どう、どうなることでもなさ
なくて、なすがままにしてたら何
とかサンドトラップで止まって
くれた」

岡崎と新井がトップにたつ

ダーの坂井は、SS1で大嶋を
パスするロスもあり3秒差とし
たものの、SS2でウェット路
面にドライタイヤで勝負をかけ
て失敗。SS3は2秒差にまよ
めたが、トップと16秒差の7位
と出遅れた。また、石田正史は
SS1のスピンがあつて19秒差
の8位。片岡はサーキットにタ
ィヤが合わなかったのか、SS
2、3で遅れて23秒差の9位に
低迷した。

新井、岡崎という予想外（失
礼、のりダー）が誕生して興味
深い展開となった今回のACK
は、ハードなルートが待ち受け
るラリー区間に入りました。

サーキットを離れてからは、
SS3が1区間と、約4kmの短い
CPスタートのハイアベと、約
7kmのバスコンハイアベが置か
れていた。後者はのれんが、前
者はCP作業に用いるタイムが
ロスタイムとなるため、なか
なかセセのCPだった。さらに、
1ステ最終にも、やはりのれ
ん4・47kmのCPスタートハイ
アベが置かれるハードなステ
ージだ。

最初の4kmのハイアベでハ
ブリングが起きた。石田正史が石
を抱いてタイロッドを破損しリ
タイヤしてしまつたのだ。

「コーナリーの立ち上がりで避
けるどころじゃなかった」

と悔やむ。

このハイアベは新井が1秒遅
れにとどめ、サーキットステ

順位		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50		
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50		

ジグの快走を維持、後部もリ秒遅れと健闘したが、差が若干開き始めた。さらに約7kmのバスコンハイアベは、西尾のナビ山口選手と地元河野浩史のナビ尾木孝弘がリ点に抑えて、いよいよこのラリーステージの林道SS5だ。ここまでは新井がリーダーの座を維持、10秒開いて岡崎新井とリ秒差で後部がトップ3を形成していた。

しかし、「あかんなあ、優勝も十分あったのに」ととゴール後、勢をかみしめたのが岡崎だった。なんとコースアウトしてしまったのだ。久々のリーダーに気をよくしていた岡崎は、「悪天候やろ、霧やろ、舗装もあるやろ。勝つのはだれやろ、オレしかいないやろ」と自信満々にサーキットをスタートしていったのだが、すべては後の祭り。

実際、時代を遡うことに大抵

新井を襲ったSS8の悪夢

「ステテを壊してトップに新井、一番手には後部と片岡が15秒差だ、新井は」

「特に問題なく、決まるといっています。でも、道がひどい状態です。だから迂回しながら走ってますよ（笑）。トップアといって何が起るかわからない。ステテが勝負でしよう。ステテさん（叔田悠）に先を越されてますから、頑張りますよ」と慎重だ、もう後部は

「15秒差でしよう。苦しいんじゃない。こういう（覚悟）道って、オレ好きじゃないさ。苦しいなあ」と今一歩さえない表情だった。片岡に片岡は、「タイヤが出たりしました。きょうは、片岡走りをしてないで、慎重に抑えて走ってる。（笑）。それがいいみたい。ばくにも、学習能力があるんですよ（笑）」と満面に笑みを浮かべていた。

「自分がインプレッサの特性をまだつかみきれないんだ。どうもシッカリできないよ」と険しい表情を浮かべている。5位は昨年優勝の松本だが、新井にリ秒も離され、「あかんなあ、全然遅い。こういう場所は元々苦手にしてないんやけどな。何でやろ、タイムが出ん、離され過ぎや」と、こちらももど然たる表情で返答がたいみドだった。彼ら以降は15秒離れて加勢、さらにSS5でもコースアウトして26秒と大きく離れた西尾、2秒差で右田雅之が8位と健闘し、6秒差で大嶋が続くが、トップ争いは完全に上位3人に絞られたようだ。恐れを知らないデビニ1当頭

「へえ、ばくの親父とそんなに年が交わらないじゃないですか」という新井の暴言（汗）を大庭謙介が笑顔で聞いていたシーンをお忘れられないのだが、大庭と後部は同じ年、後部の息の長さを称えるべきか、ヤングドライバーの出現を喜ぶべきか。親子は2年の離れた村決は、じつに軍配が上がるのだろうか。さらに、開幕戦4位スタートと季節好調の片岡の走りも注目された。第2ステージは、SSが4区間置かれ、Cがスタートハイアベ、バスコンハイアベが1区間ずつ、ゴールまで気が抜けないステージだ。

このハードな設定が、いよいよキバをむいた。ステテ最初のSS6で、あろうことが片岡のエボ田がスタートしてしまった。車気系トラブルだったのが、悔やみきれないリタイヤとなった。この3kmの悪路のSS8は、後部が反撃ののろし、ベストタイムをたたき出した。新井は3秒遅れ、ベチランが若者を追い詰め始めた。

しかし、新井も負けていない。続くSS7では後部のベストタイムに並びかけた。差は10秒のまま。さらに、新井は16CPのハイアベで最少遅れの25秒、32秒遅れた後部との差をさらに広げていた。残るはダートと舗装がミックスされた3・42kmと1・7kmのSS5だけ。いかに

「エンジンが水を吸ったみたいで……」と新井



まれているだけに、ターマック SSSは得意とするところ。3SSが終了した時点で、古武に9秒差の2番手につけた。3位は鎌田が松井に遅れること10秒、以下9秒遅れて山田。3秒差で田口、小林、増村が1秒ずつの差で続き、4秒差に水瀬浩一。1秒差にF-Xの森博喜と大健剛の横山がベスト10を構成した。

逆に、優勝候補のひとり山田は最初のサーキットランでコースアウトして、3000点の大減点を計時されている。ラリー区間に入ると、古武のリードはさらに広がる。SS5で2番手の松井がコースアウトしてしまったこともあり、2位以下を20秒以上引き離して余裕のリードの座を確保した。逆に2位以下の争いはシビアだ。ラリー区間に入って鎌田のナド陽坂豊がミス、いきなり、田口を筆頭にきん差で増村、鎌田、山田、水瀬、小林、横山が並ぶ展開になった。最初のハイアペは小林が最少の30秒遅れにとどめ、SS5は鎌田とともに、なんと新鋭横山がベストタイム。各CPごとに2番手の名前が変わる大混戦となった。

1ステを終了して、トップ古武は安泰。24秒のセーフティリードだ。9位にはラリー区間に苦しみながら鎌田がつけた。しかし、1秒差で田口。さらに2秒遅れて増村と、SSを1秒差、最終ハイアペ最少遅れて林健盛

り遅れた原口。4秒差で横山、小林はハイアペで遅れて9秒差となった。序盤展開した水瀬は最初のハイアペのスピンで後退している。

競走のトップにいる古武は、「ボディを新品に換えてきて、ものすごくハンドリングがいい。道が荒れて不利っていうても、

逆転劇の主役は3年目増村

第2ステージが開始されると、山田がベストタイム2分38秒をマーク。一方、古武はほとんど悪化する路面に手こずって、3分4秒の平凡なタイムで終わってしまふ。しかし、まだ差は17秒。続くSS7は四国の竹之内一輝がベスト。1秒差で山田、横山、古武も1秒差の3番手タイムをマークした。このあたりから大混戦同様、優勝争いの雲ゆきがおかしくなってきた。続くパスコンハイアペとCPスタートハイアペは、時折激しい雨の降る状態だった。ちようどう区間とも、古武のゼッケン付添で激しい雨が降ったという。

「大気は文句を言ってもしょうがない。」と古武は言うが、おそらく水を吸いこんだのだろう。エンジンが不調をきたした。この2区間、特にパスコンハイアペでは84秒と大きく遅れてしまったのだ。首位転落。古武は一気に5番手まで順位を下げた。

何年もマーチングを運転しているからね。慣れっこですよ。(笑)。正確な差はわからないけど、まあ、優勝でしょう。(笑)。

と早くもV宣言、サービステは誰かにだれもが古武の逃げきりを疑わなかった。しかし、Cクラス同様、鉄壁にドラマが待ち受けていた。

これで首位になったのは増村だった。ラリー区間を跑って堅実な走りを見せてトップに躍り出た。2位は6秒差で山田、9秒差で原口が続く。彼ら以降はやはり雨の餌食となって若干差が開き、優勝争いは3人に絞られたかにみえた。

だが、山田がSS8でコースオフして後退。さらに、後方から一気にまくってきたドライバリーがいた。横山だ。SS8、9と連続して竹之内とともにベストタイムをマーク。原口を逆転して、トップの増村に3秒差まで迫った。だが、追撃もここまて、横山の全日本戦初優勝の夢は果たせなかった。

結局、増村が3秒差で逃げきり。全日本戦初優勝を助けた。「田口さんかひょうきんつきで優勝したのもちようど3年目。ばくもここしは年目なんです。だから、ここしは何とかなった。だから、それが早く実現できてうれしです。古武さんの状態はわからな

なかった。だから、とにかく最後まで走りきるだけ」と思っていました。とにかく、こんなふうらしいことはないですよ。」

と流びにひなっていた。増村は参戦初年度にいきなり上位に入賞し注目されたが、2年目の昨年あたりからスランプに陥っていた。顔を合わせるすし、「走りはどうでしたか?」

と必ず聞いてくる。生まじめなのだろう。その生まじめさがマイナスしていたのかもしれない。田口に先を越され、長谷川誠にも昨年モンテレーで先を越されてしまった。だが、勝つだけの速さは十分持っていた。この優勝でなにか吹っくれたものがあるなら、これから先、増村は大きく成長するだろう。今後の戦いが重要だ。

Aクラスは、開幕2連勝の栗津原豊が、全日本ダートラの開催クラブに当たったために欠場だが勝つてもおかしくない状況だった。

まず先手を打ったのが、ニユー・ミラの平塚忠博。ジムカーナをベストタイムで先行したが、エンジンが高回転域でリミッターが効いた状態になってしまい、サーキットランでは低速、代わってトップになったのが同じくラの島田雅直だ。2番手にはそろそろ優勝の文字がはしり前嶋光男が2秒差、5秒遅れて原山陽漢、14秒遅れて守屋教昭。平塚は17秒遅れ、さらに25秒遅

れて柳野広が続いた。ベテラン原田憲幸は最初のサーキットランで横転してしまった。ラリー区間に入ると、前嶋が島田を捕らえトップには、だが、すぐにハイアペで原山が逆転と、混戦模様でラリーが進んでいく。だが、パスコンハイアペで柳が、「このへんは地区戦で走ったことがある。」

と地の利を生かし見事に読みきって、一気にトップを奪取。差も10秒以上に広がってしまった。これでこの日は、最初の林道SS5でもベストタイムをマーク。1ステ最終ハイアペも最少減点でのりきって、1ステ終了時点で2番手に引寄せられた。2番手にはSS7の座を確保した。2番手にはSS2番手タイムで再浮上した前嶋がつけていた。

2ステに入っても柳の走りは好調で、SS5でもベストタイムをマーク。続くSS7は前嶋に譲ったものの、16CPのハイアペ区間で驚異的なタイムをマークして、最後のSS8もベストで締めくくり、全く危なげなく2位に原山もの大差をつけて逃げきった。

2位以下の戦いは逆にシビアだった。平塚が15CPのパスコンハイアペをベテラン黒田正彦ナビの力もあり最少減点でクリア。さらに、SS8では前嶋がコースオフで遅れ、結局、平塚が3位に浮上。3位は最終SSで原山が逆転して入賞した。

2位以下の戦いは逆にシビアだった。平塚が15CPのパスコンハイアペをベテラン黒田正彦ナビの力もあり最少減点でクリア。さらに、SS8では前嶋がコースオフで遅れ、結局、平塚が3位に浮上。3位は最終SSで原山が逆転して入賞した。